

石山修武

八月二日

昨日G A撮影終了。

秋からの仕事に関して少し考えなければならぬ。無駄な事をしている時間はあんまり残されていない。思えば沢山無駄とも思える事をやってきた。振り返れば墨々たる残骸の山である。しかしその残骸の山に時々花が咲くのが面白い。菅平の開拓者の家も私の自邸によって枯れかけていた花が又咲いた。この径はしかし厳しい。年令と体力と、ようするに自分の力と時間との追いかかけっこになるからゆくか戻るか熟考する必要がある。でも、行かなくちゃしょうがないんだろうな。

午後星の子愛児園第一回定例。コスト、工期共に極度の難工事だが何とか乗り切ろう。夕方日本フィンランドデザイン協会会議。2002年の「静けさ」をテーマにした展覧会の打合わせ。

夜G A坂下より電話あり。二川氏より又、撮り直しを命じられたとの事。おまけに二川氏御本人も撮るのだと言う。光栄な事だが、坂下に「お前の写真には風が感じられない。」と名人上手に特有の科白を吐いた後で、名人登場となるわけで大丈夫かなと要らぬ心配をする。しかし、とにかく工事途中の建築ながらそれでも名人を引つ張り出せたのは我ながら何とも嬉しい。この感じは恐らく他人にはチョツと気違いじみた風に受け取られるだろうがこのオヤジが元気なうちに熱が出る程にうならせてやるのが一つの目標なのだから、バカと思われても仕方がないことなのだ。下

の家を取り払ったら鈴木博之藤森照信にも見て貰わなくてはならない。

八月三日

今日は午後便で帯広。十勝へレンケラー記念塔の竣工検査。昼過ぎ光が指して来たので二川さん来着。坂下に色々教えながら撮っていた。おわりまで立会いたかったが飛行機の時間があるので途中で失礼する。

六時四十分帯広空港着。驚いたことに東京三十五度に対して十四度Cであった。久し振りに気持の良い空気とキリ状の湿り気に触れて体が嬉しがっているのが自分でもわかった。

空港にはいつものように北海点字図書館の後藤さんが迎えて下さって夕闇の中を現場へ。どうやら、やっぱりこの建築は上手くいっている。外はパーフェクト。内に二、三問題があるがこれは修正できる。本当、自分でこんなことウェブサイトに書き記す、おろかさは充分にわかっているのだが、それでもこの塔は上手くいった。ここまで上手くいくと誰にも視せる必要がない位だ。ヘレンケラー記念塔と名付けたのは点字図書館の歴史からだが、眼でモノを視ない人達の為にと想着て建てたのだから、彼等彼女等が眼で視ないで多分、体感のようなものでこの塔を感じてくれる筈だから、本来的には眼の見える人にもそうして欲しい。つまり視せない

のが一番なんだが、そうもいくまい。内部も上手くいっている。体全体を使って空間をたどってゆく感じが素直に出ている。屋上の空間も上手くいった。一層目のフードとダクトが少し問題だが直させれば良い。

倉本と檜垣は誉めてやらなければならぬ。良く極寒の地で

五ヶ月頑張った。

同時に世田谷村とヘレンケラー記念塔ができて、世田谷村はまだ途中だから比べられぬが、今のところはヘレンケラーの方が圧倒的に良い。

つくりながら思っていたのだが、私の中に矛盾相反する二つの何かがあつて、一方を世田谷村、つまり自邸で、一方をこの塔でと考えていた。二つの建築でテンションを張って私の少し遅れた中年期をやつていみようと考えていたが、こりや全然目論見が外れた。ヘレンケラー塔の方に世田谷村はくるまれてしまっている。どういふ事なんだコレは。

言ってみればコレは五重の塔、三重の塔の類のモノだ。機能があつて、ない。基本的にはゲストハウスだろう。最上階五層は空に開いた内部、ホ口尻岳が遠く眺められる窓がある。四層は茶室。内外が混入している。三層はガランとした空間、ほとんど闇である。二層は水まわり、ホ口尻岳が眺められる風呂があつて色々な隅がある。一層は砂利じき。内外の区分けをなくした小さなサロン、ここで食事ができる。地下は倉庫。五層をつらぬく垂直方向の窓があつて、各層に雨の音や風の音、光のぬくもりが感じられるような工夫がある。星の子愛児園、聖徳寺はこれを超えられるだろうか。

八月五日 日

今日は一日休養。流石に時々休みをとらなければ危くなつてきた。朝六時起床。屋上菜園に水をやる。つゆ草のブルーの小花と月見草のイエローの花が何とも気持が良い。植物の成長は順調で今は完成予想の六割くらいだろうか。のんびりと2階の吹抜けのところでももしていない。昼過ぎに台湾の中原大学生が三名見学

にくる予定があるが、他は何も無し。家の中にセミが飛び込んできて、一生懸命なっている。セミの寿命はセミになってから三日程とつる覚えている。コイツは何日目のセミかな。